

聖書解釈の基盤と方法(論)をめぐって

宮村 武夫

序

福音主義の聖書観をより直接に課題にした、第二回神学研究会議に引き続き、第三回神学研究会議においては聖書解釈と説教の課題が取りあげられた。^①これは、自然な流れと言える。聖書観に根差しつつ、聖書解釈はなされ、聖書観の内実が聖書解釈を通して明らかになる。更に、聖書解釈は説教へと方向づけられ、説教は何よりも聖書解釈に基づくのであるから。この道筋を意識しつつ、以下において、福音主義聖書解釈の基盤と考えられる幾つかの点を確認し、それに基づき聖書解釈の方法(論)をめぐり思い巡らしたい。

一 福音主義聖書解釈、その基盤の確認

(A) 聖書観と聖書解釈

(1) 両者の密接な関係

何を解釈する場合でも、解釈者が対象をどのように考えるかにより、解釈の態度、方法は影響を受ける。聖書解釈の場合も全くその通りで、解釈の対象である聖書をどのように見るかの課題、つまり、聖書観は、聖書解釈の態度、方法と密接な係わりを持つ。それ故、福音主義が聖書観を重視し、これに固着するのは、何も福音主義のみに見る現象でも、その立場の狭さを示すでもない。豊かな広がりを保証するためと受け取りたい。

(2) 聖霊、聖書、教会

では、福音主義の聖書観とは何か。その中心は、聖霊、聖書、教会の相互関係を、以下の三重の意味でダイナミックに捕らえる点にあり、無神論的立場、自由主義的立場、ローマ・カトリックの立場との比較が大切であろう。

聖霊と聖書(聖書は神の靈感による書)

聖書と教会(聖書は信仰と生活の唯一の規範)

聖霊と教会(聖霊と聖書に導かれ、常に改革され続ける教会)^②

この聖書を誤り無き神のことばとして受け止め、聖霊と教会の生きた関係を重視する福音主義の道は、「我は聖霊を信ず、聖なる公同教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体のみがえり、永遠の生命を信ず。アーメン」と、使徒信条が告白している道に他ならない。神の聖なる、みこころが啓示されている聖書。この聖書を信仰と生活の唯一の規範として従う聖書的教会こそ、聖なる教会であり、使徒的、歴史的教会と呼び得るのではないか。それ故、福音主義聖書解釈は、歴史を貫き、全世界に広がり行く同じ一つの教会、公同の教会に属する者としての明確な意識に基づいてなされるのである。

(B) 聖書の成立と聖書解釈

(1) 歴史的事実

ヘブル人への手紙1章1、2節で、「神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られました。この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。」と、聖書自身が明言している通り、聖書は、長い期間に渡り、様々な人々を通して、多様な文学類型により記されて来た。つまり、古代中近東世界を背景に形成されたイスラエルの民、信仰共同体としての彼らの宗教史を通して、旧約聖書は生い立ち、成立して来た。また、新約聖書は、ヘレニズム世界を背景に形成された、新しいイスラエル・教会、礼拝共同体としての彼らの生活を通して書き記された。ここに見るのは、全能の神（一度に凡てを成し得たもう御方）が事実取りたもうた「一度に凡てではなく」の原則である。

以上のことから、旧約聖書と、その背景である古代中近東、より直接的にはイスラエルの歴史、特にその宗教史との間には、当然類似性を認めねばならない。同様に新約聖書は、その背景であるヘレニズム世界、その中で誕生し成長して行く神の民・教会の生活と分離して与えられたのではなく、当然、両者の間にも類似性がある。

しかしながら、旧約聖書は、その背景となる古代中近東世界の産物とのみ言えないことは勿論、イスラエルの歴史そのものやその一部、更に、イスラエルの宗教史そのもの、あるいはその一部とのみ考えてはならない。同様に、新約聖書も、ヘレニズム世界の他の文献と全く同列に置くことは出来ない。更に、教会の誕生、成長と無関係に新約聖書を見ることは許されないが、時間的前後関係のみを重視し教会が聖書を生み出したとして、聖書を教会と同じレベルに置いたり、教会を新約聖書的前提と見てはならない。新約聖書の内容が明示していることは、教会は最初から聖

書に裁かれている事実である。新約聖書は、初めから、教会の上に位置し、教会に対し絶対的権威をもって宣言している。^④

このように、旧・新約聖書は、古代中近東を背景とするイスラエルの歴史、ヘレニズム世界を背景とする教会の歴史を通して与えられて来たのであるが、歴史そのもの、歴史と全く同じ立場に位置するものではない。イスラエルや教会が自由に出来ない。イスラエルや教会の現実と際立つ、区別性の側面を最初から持つのである。

(2) 比較により、類似性と区別性を

以上に見る事実根差し聖書解釈を進める際、福音主義の聖書観に立ち、聖書解釈の方法論の基盤を確認することが大切である。このために、渡辺公平教授の論文、「宗教と歴史問題の解釈者（実存主義的神学の方法論を前にして）」^⑤が重要な示唆を与えてくれる。つまり、神の啓示構造を、「啓示（聖書）と歴史」という型で考え、啓示から歴史へでも、歴史から啓示へでもなく、「啓示と歴史」とからキリスト教（理解）への道^⑥を進み、啓示と歴史のあるべき関係を正しく理解しつつ、聖書解釈をなそうとするのである。具体的には、比較を通して類似性を見、同時に区別性を明らかにして行く聖書解釈の方法の必然性、有効性の確認である。この一見単純に見える、比較により、類似性と区別性の両方を同時に見続けて行く解釈方法こそ、「区別することにおいて類似性を見失うことなく、また類似性を見ることにおいて区別性を見失うことなく、両者（啓示と歴史）を区別するとともに類似性を考え、類似性を考慮しつつも、しかも区別性を忘れない」道なのである。聖書解釈を進める際、聖書をめぐり、あらゆる比較をなしてよいばかりでなく、しなければならぬ。比較によって、聖書全体の、また特定の聖書テキストの独自のメッセージを聞き取ることを目指すのである。

(C) 聖書解釈の歴史と聖書解釈

(1) その大切さ

ヘブル人への手紙1章1節が明示しているごとく、聖書は一度に凡て書き記されたのではないことを確認したが、正典として完結した聖書も、一度に凡て理解されたのではない。また、聖書を読み、解釈するのは、今、ここに生きる自分が初めてではない。世々の教会は、それぞれの時代、それぞれの場所で、聖書を読み、解釈し続けて来た。それ故、教会の歴史は、聖書解釈の歴史なのである。^⑧

過去の教会の聖書解釈は、勿論、それが凡て正しいわけではない。それにもかかわらず、聖書解釈の歴史を学ぶのは、今、ここで我々が聖書解釈をなす上で、持つべき問題意識、備えるべき技術が何であるかを知り自らが聖書解釈者として整えられるため有益である。

しかし、聖書解釈の歴史を学ぶのは、有益な情報を受けるためだけではない。聖書解釈の歴史全体を見通すことにより、今、ここで聖書を解釈しようとしている自分自身は、世々に渡り聖書を読み、解釈し続けて来た教会の歴史全体の流れの中で、いかなる位置を占めているのか、自分自身の歴史的位置を確認し得る。また、そうする必要がある。自分自身の歴史的位置を確認し、責任と特権を自覚することは、聖書のテキストを反復、継続的に読み続けて行く、地味な聖書解釈の歩みを重ねるため、大きな励まし、原動力となるのであるから。

(2) 聖書に見る聖書解釈

聖書解釈の歴史と言う時、特に注意を引く興味深い現象がある。それは、聖書が聖書を引用し、解釈しているとも表現すべき事実である。この場合、新約聖書が旧約聖書を引用し、解釈しているのは、明白な事実で、十分考慮されねばならない。^⑨しかし単にそれだけではなく、旧約聖書の内部においても、旧約聖書のある箇所、他の箇所につ

いて言及、あるいは他の箇所を引用し、解釈している。^⑩また、新約聖書においても、数多くの旧約聖書の引用と共に、新約聖書の一箇所を描く事柄（特に、福音書における主イエスのそれ）が、他の箇所と言及され、解釈されていると見てよい場合も少なくない。つまり、聖書のある箇所が他の箇所について言及、引用、解釈している場合も、教会の聖書解釈の歴史同様、長い年月を積み重ねたものであり（アダム、アブラハムからは勿論、モーセからヨハネの期間でも）、実に豊かな広がりを含む。^⑪その一つ一つの事例を厳密に考察すると同時に、聖書が聖書を解釈している現象を全体として大きく見通す必要がある。つまり、聖書は、時や場所の隔たりを内に包みつつ、同時に言及、引用に見るごとく、隔たりを越える視座を初めから持つのである。

(3) 聖書的エキュメニズム

ここで一つ明確な区別をしなければならない。それは、聖書が聖書を引用し解釈している場合と、教会が聖書解釈をなす場合との区別である。聖書記者が聖書の他の箇所について言及、引用し解釈している場合は、靈感されており、彼らは誤りのない解釈をなしている。しかし、教会が聖書解釈をなす場合は、同じく聖書の助け（聖書の内的証言、聖書の内的照明）を受けるとは言え（類似性）、靈感の場合とは区別され（区別性）、誤る可能性を含む。^⑫それ故、聖書記者たちの聖書解釈は、絶対的となり得、また常にそう受け取らねばならないのに対して、教会の聖書解釈は、それがどれ程優れたものでも、絶対化することは許されない。過去の聖書解釈を絶対化し、それを今、ここで受け取ることを見てはならない。各時代の教会が直接聖書に聞く努力を払い続ける限り、^⑬先達たちの聖書解釈から、彼らの誤りを通してさえ大いに学び得る。時代や場所の相違を越えて聖書とともに聞く、この共通の基盤に立ち、真の交わり、対話が成り立つのである。時代と地域、その他あらゆる違いを越えて、聖なる公同の教会の中に生かされている者同士の交わり、聖徒の交わりを、聖書解釈を通して経験し、深め得る。現代の教会について言えば、

自分たちより以前にそれぞれの歴史的な位置でその歩みをなした、凡ての時代の凡ての教会と、同じく聖書に聴従することにより、時代の隔たりを越えた交わりを持つ道が開かれる。この交わりは、単に時代的隔たりを越えるばかりではない。同時代においても、地理的、教派的隔たりなど、種々様々な隔たりを越えて、実に豊かに広がり深まり行く可能性がある。このように、聖書を信仰と生活の唯一の誤りない規範とする福音主義の聖書観は、その狭さではなく、深さ、豊かな広がりをも本来的特徴とし、それは、何よりも聖書解釈の営み、そして説教を通して明示されるべきである。この聖書的エキュメニズムは、福音主義神学会の場においても、現に経験されつつあると言えないであらうか。

以上垣間見た、聖書の聖書解釈と教会の聖書解釈の関係は、結局、聖書の靈感と聖霊の内的証言、内的照明の關係に根差す。この場合も、聖霊、聖書、教会の相互関係をめぐるダイナミックな理解が大切で、福音主義の聖書観がその聖書解釈といかに密接に係わるかを示している。

二 福音主義の聖書解釈、その方法（論）をめぐって

以上、福音主義聖書解釈の基盤を確認して来たが、それでは、その聖書解釈の方法（論）とは、どのようなものであろうか。それは、聖書が歴史を通して与えられた、神の啓示であるとの基盤に立つ方法である。つまり、聖書の立場に立つと主張しながら、聖書の歴史性を軽視したり、まして無視することなく、また反対に、聖書の歴史性に立つとして、啓示を歴史の基盤のみからしか考えず、聖書の啓示における超自然性を見失うことなく、啓示と歴史からの道に他ならない^⑤。具体的には、聖書を、その書かれた背景に属する他の文献と比較しつつ、両者にある類似性を認め

ながら、同時に区別性、つまり、聖書自体の周囲のものに対し際立つ、特徴あるメッセージを聞こうとするのである。更に一般的に言えば、他のものと比較しながら、解釈しようとする聖書テキストそのものに聞く方法である。

また、啓示と歴史からの道は、具体的には、聖書の歴史的文脈を重んじる解釈方法を指し示す。このように、福音主義の聖書解釈を、(A) 比較しながら、(B) 歴史的文脈を重んじるとの二つに焦点を絞り、以下において、新約聖書解釈の方法（論）について思い巡らしたい。

(A) 比較しながら

(1) 新約聖書と同時代の文献との比較

さて、比較しながら聖書のテキストの独自のメッセージを聞こうとする際、その一つとして、新約聖書が成立した背景であるヘレニズム世界の文献と比較し、両者にある類似性を十分注意しながら、その区別性、つまり、新約聖書テキストの独自のメッセージを味わう道がある。

たとえば、ヘブル人への手紙11章8〜11節に見る、アブラハムと都の關係について、ヘブル人への手紙の著者とフィロンの理解と表現を比較すると興味深い。両者は等しく、伝統的素材に加えて都の概念を用い、アブラハムの信仰を解釈し、表現している。この場合、両者とも「上なる天と地」の図式を用いるなど、興味深い類似性を認め得るが、類似点と共に、両者の相異、区別も鮮やかになる。フィロンと比較すると、ヘブル人への手紙の著者の終末論、信仰共同体理解の独自性は明らかになる^⑥。

(2) 新約聖書と作業仮説に基づく事柄との比較

これは、新約聖書のテキストそのものに根差す。新約聖書のテキストに固着し、そこから推定される事柄と比較し

つつ、新約聖書のテキストに聞こうとするのである。たとえば、ガラテヤ人への手紙で、パウロが論敵たちを鋭く批判、攻撃している言葉から、論敵たちの主張がどのようなものであったか作業仮説として立て、作業仮説として想定される論敵やその主張と比較しながら、パウロの言葉に聞こうするのである。このように生きた状況を推定することにより、パウロの言葉をより正しく、深く、豊かに受け取る可能性が開かれる。この場合、作業仮説が本来内に持つ相対性を常に意識し、分を弁えるべきで、これを絶対化してはならない。聖書テキスト自体により、作業仮説の妥当性が終始問われるべきであり、聖書テキストを無視したり、テキストそのものに矛盾する作業仮説を主張してはならない。この分野の広がりも豊かで、聖書解釈者を招くが、作業仮説であるとの限界を忘れる危険性がある点、常に注意が必要である。^⑥

(3) 聖書と聖書の比較、

a 新約聖書の旧約引用

新約聖書解釈において、聖書と聖書を比較し味わう幅広い分野の内、まず第一に注意したいのは、数多い旧約聖書からの引用である。旧約聖書の本来の文脈、表現などと、旧約聖書を引用している新約聖書のテキストのそれとを比較して行くのである。この場合、直接の引用以外にも、より間接的な言及とも呼ぶべき現象にも注目すべきである。たとえば、マタイの福音書21章12〜17節に見る、宮潔めの記事について。直接の旧約引用としては、13節のイザヤ書56章7節、16節の詩編8編2節がある。しかし、ダビデの子（第二のダビデ）の入城と言うことで、ダビデ（第一のダビデ）のエルサレム入城が意識され、Ⅱサムエル5章8節の「このため、『めしいや足なえは宮にはいってはいない』と言われている」との係わりで、マタイ21章14節に見る「また、宮の中で盲人や足なえがみもとに來たので、イエスは彼らをいやされた」との記述がなされていると見るべきではないかと思われる。これは、勿論、引用と

は言えないが、より間接的な言及と言えよう。つまり、イザヤ56章7節を鍵として、イザヤ56章7節の文脈で取り上げられている外国人や宦官（イザヤ56章3節）、そして盲人や足なえ、更には子どもたちばかりでなく、幼子や乳飲み子たちまで、文字通り「すべて」（パウロがローマ1章16節で、ユダヤ人、ギリシャ人の差別なくすべてと宣言しているように）の人々が主イエスのみもとに集められている。これらの人々こそ、キリストのからだなる教会（ヨハネ2章21節）であり、「すべての民の祈りの家」（イザヤ56章7節）としての新しい宮とマタイは見抜き、この歴史的事実を描写していると言えないだろうか。

なお、新約聖書の引用と共に、たとえば、1ペテロ2章21節に見るように、新約聖書の一つの箇所で描かれている事柄を、他の箇所で言及し、解釈している場合も興味深い。

b 福音書の並行記事

これも、誰でも認めるように、実に豊かに開かれた分野である。並行記事を比較しつつ、福音書テキストを解釈しようとする場合、注意すべき二つのことがある。一つは、並行記事間の相違を何とか調和させようとして、相違する並行記事の諸点に対し不自然な取り扱いをして何でも調和させようとする傾向である。この場合、巔頂の引き倒しでも言うべき事態が起こりやすい。他方逆に、相違を直ちに矛盾と決め付けられないようにも注意すべきである。これらいつれの方向でもなく、「じつと我慢」とでも表現したい原則が大切である。この福音書記者は、他の福音書記者と違い、何故、このことをこのように描いているのか、その意図を探るべきである（この場合も、類似性と区別性の関係が大切）。この意図こそ、福音書記者のメッセージ、神学であり、彼の立つ視点と言える。同じ歴史的事実（その歴史性に飽くまでも固着しつつ）が視点の違いにより、それぞれ特徴ある視野が開かれ記述がなされている。^⑦この事実を認め、大切にするのは、福音書記事の歴史性を軽視したり、ましてや無視することを決して意味しない。

c パウロ書簡

パウロの書簡、神学は、ただパウロのみに集中するだけでは理解が困難に思われる、発信人パウロと共に、受信人にも等しく焦点を合わせる必要がある^⑧。そして、パウロ書簡全体を見渡せば、受信人が異なっている事実は明らかであり、この実に明白な事実立ち、パウロ書簡、パウロ神学は理解されねばならない。発信人パウロに焦点を合わせると、ダマスコ途上での経験が何よりも大切な基盤である。この時点から地上の生涯の歩みを完走するまで、統一のある神からのメッセージをパウロは生涯に渡り一貫して宣べ伝えている。しかし、書簡の受信人は様々であり、直面している課題は多様である。パウロは、この受信人側の多様な状況、課題に応じて書簡を書いている。それ故、受信人側の事情の多様性に基づくパウロ書簡の多様性を、パウロのメッセージ、神学における相互矛盾とか対立と見るべきではない。また、パウロが生涯の歩みを重ねる過程で、彼の宣教内容に変化が生じたり、訂正がなされたと思定すべきではない。そうではない。一方では、発信人パウロに焦点を合わせ、パウロのメッセージ、神学の一貫性、統一性を見据える必要があり、同時に他方では、受信人をめぐる多様な諸事情も十分考慮しつつ、パウロ書簡、神学の多様性を重視し続ける。この両側面が共に大切なのである。この理解は、聖書解釈の方法としては、パウロの書簡を相互に比較して、パウロ自身の一貫性と共に、受信人側に基づく多様性を認める道に他ならない。たとえば、御霊の賜物について言及している、ローマ人への手紙12章と1コリント人の手紙12章を比較することにより、御霊の賜物をキリストのからだなる教会のあり方と固く結び付けている、パウロの書簡、神学における一貫性の側面、また、ローマ教会、コリント教会それぞれが直面している異なる状況、問題に応じて、パウロが多様な表現をなし、異なる点が強調されている側面、この両側面を認め得る。パウロ書簡相互の比較も福音主義新約聖書解釈がなしてもよい、またなすべき広く開かれた分野と言える。

d 繰り返し

使徒の働き23章12節から35節に、興味深い現象を見る。パウロ殺害の計画を、ルカは何回も繰り返し記述し、強調している。たとえば、①12節から15節では、パウロ殺害計画を客観的に描写。②16、17節では、このパウロ殺害計画をパウロの姉妹の子が耳にし、それをパウロに伝える。殺害計画が逐一報告される。③19節から22節では、パウロの姉妹の子が、パウロ殺害計画を千人隊長に伝える様子を描写。④30節では、千人隊長ルシャが、総督ペリクスへの手紙の中で、殺害計画を記述。⑤34節は、殺害計画を記述するルシャの手紙を、総督ペリクスが読む場面。これでもかこれでもかと言いたい程、ルカはパウロ殺害計画を伝えるに当たり、それぞれの時と場所、登場人物など、場面を移行させながら繰り返し、同じパウロ殺害計画を記述している。同じ事柄を、実に多様な表現方法で述べている。それぞれを相互に比較することにより、①から⑤の記述ひとつひとつの特徴を見いだし得る。

一つの歴史的事実(たとえば、パウロの殺害計画)を、このように繰り返し(コルネリオの記事、パウロの回心の記事なども)、多様な表現で描き得るのは、それぞれ固有の視点に立つ故であり、そこに多様な視野が開かれるためと考えられる。語り手、描き手の視点と、そこに開かれる視野(見えてくるもの、描写としての記述)との関係は、福音書の並行記事の解釈に対しても示唆を与えてくれる。

(b) 歴史的文脈の重視、その二つの方向

以上見てきたように、啓示と歴史からの道を目指す福音主義の聖書解釈は、二つ以上のものを比較して類似性と区別性のいずれをも注意する。それと共に、啓示が歴史を通して与えられている事実に基づき、歴史的な文脈を重んじ、聖書解釈を進める道(いわゆる、歴史的・文法的解釈)でもある。この場合、聖書テキストが成立した直接の歴史的

背景を重視する一般的な意味での歴史的文脈の重視と共に、二つの方向に広げて、歴史的な文脈、つまり、時と場所を十分考慮しながら、聖書解釈をなすべきことを提唱したい。つまり、一方は、より微細に見る場面展開の重視。他方は、巨視的に歴史的な文脈を見通す方向である。^⑨

(1) 場面展開、論理展開、聖書構造

「一度に凡てではなく」の原則は、具体的な聖書記述においても当てはまる。たとえば、マルコは、福音書全体を幾つもの場面（いつ、どこで、誰が、何を）を幾重にも積み重ねることにより記述している。それ故、歴史的な文脈を重んじる解釈方法は、時と場所に細心の注意を払い、マルコの福音書をそれぞれの場面に分けて行く。一度確認された一定の場面においても、更に細分化される時、場所、登場人物などを中心に一段と微妙な展開を見定め、出来るだけ細部に渡り場面展開に従い、マルコの記述に聞き従う必要がある。しかも、それぞれの場面の配列は、マルコの明確な意図に基づくと思われるので、全体の流れを無視して、ばらばらに各場面をどれ程詳しく分析してみても、それだけでは、福音記者マルコのメッセージを味わうためには、不十分である。まして、各場面の順番、関係を、マルコの意図を無視して相互に矛盾するとして切り捨てたり、順番を変えようとするのは、余りにも乱暴な話である。以上のような場面展開重視の解釈方法は、福音書、使徒の働き、ヨハネの黙示録などの解釈のため特に必要であり、有効と考える。

次に、場面展開と深い係わりがあるものとして、論理展開に注目したい。いわゆる論理語を手掛かりにするなどして、^⑩新約聖書記者の論理展開を跡付けるのである。この場合、場面展開の際と同様、分析的な努力と共に、全体を見通す総合的努力も求められる。聖書記者が何を、いかに描いているのか徹底的にテキストそのものに即して聞き入り、何故このことをこのように描いているのか、聖書記者の意図、目的を思い巡らし聖書記者のいわば内的論理を何うの

である。このようにしてなされる論理展開の跡付けは、歴史的な文脈の重視に基づく場面展開を大切に解釈方法と深く係わり、福音主義聖書解釈の特徴となるべきものと考えられる。場面展開、論理展開の両方を注目しつつ、聖書の構造を探り、^⑪全体の筋道の中で細部を襲に至るまで味わう道こそ、聖書を反復、継続して読み続ける福音主義聖書解釈において、不可欠な柱である。

(2) 大きな文脈（創造から再創造への文脈）

あの時、あの場で書き記された聖書を、この時、この場で解釈する。その際、聖書テキストと解釈者の間に大きく横たわる世紀の隔たりの課題は、K・スタンダー教授が鋭く指摘するように、宗教史学派の台頭後においては、否定しがたい壁として、凡ての聖書解釈者の前に突き付けられている。^⑫この課題に正直に直面しつつ聖書解釈をなし、説教し続けようとする者にとって、聖書が聖書を引用し解釈している事実、あの時、あの場で書かれた聖書を、世々の教会が、この時、この場で、生ける神のことばとして聞き得る根拠を指し示していると考える。つまり、あの時、あの場の聖書記者と、この時、この場の聖書記者（前者を引用し解釈している）は、共に同じく創造から再創造への文脈に生かされている、同時代に生きる者なのである。そればかりではない。あの時、あの場で記述された聖書テキストと、この時、この場でこれに聞く聖書解釈者は、世紀の隔たりによって隔てられていると同時に、共に同じく創造から再創造への文脈に生かされている、同時代に生きる者（！）なのである。この自覚こそ、世紀の隔たりの指摘に対する唯一の答えではないか。創造から再創造へと巨視的にも歴史的な文脈を見通す心。この心を、あの若き、G. Vosが、一八九八年五月八日になした、プリンストン神学校聖書神学教授としての就任講演から深く学ばべきではなからうか。^⑬この視点こそ、福音主義聖書解釈にとって、不可欠なものの一つと確信する。

以上、福音主義の聖書観に立つ聖書解釈の方法(論)を思い巡らして来た。そして、聖書解釈は説教へと進む。結局、福音主義の聖書観、聖書解釈、その方法(論)は、聖書解釈者・説教者を含め、聖書に聞き、説教を通して生かされている者の生活と生涯によって判断されるのであろう。今、ここに誕生し、育てられる信仰共同体、地域教会の形成。この場合も、木は実によって判断される。人は生きていくようにしか聖書を解釈出来ないし、聖書を解釈していきようにしか生きることが出来ないのだから。

注

- ① この小論は、一九八五年十一月二五日から二七日まで、御殿場東山荘で開かれた、福音主義神学会の第三回神学研究会議でなされた報告に基づく。
- ② たとえば、無神論的立場では、聖霊と聖書の関係そのものが特別なものとは見られず、聖書は他の古代文献と全く同じものとして認められない。それ故、聖書と教会、聖霊と教会についても特別な関係として受け取られない。神観が決定的影響を及ぼすのを見る。聖霊(神)観、聖書観、教会観の相互関係について、以下の文章は、可能な立場がどのようなものかを示してくれる。P・ネメシエギ『父と子と聖霊——三位一体論——』(南窓社、一九七〇年)二頁。「すなわち、ある人々は、人間の理性は直接的な経験を超えることがらに關して、客観的な認識を得ることができないと思っている。他の人々はこのような認識の可能性を認めながらも神の存在を否定する。またある人々は神の存在を認めはするが、神が人類史の中に、一定の時、一定の場所で、一定の人々を通して、自分自身に關する啓示を与えたということを認めない。またある人々は、イエス・キリストによってある意味で、神の全人類に対する啓示が行なわれたということを認めはするが、その啓示を私たちに伝えている聖書が聖霊の靈感を受け

た人々によって書かれたということ認めない。更にある人々は、聖書を靈感の書として認めるが、教会が聖書に書かれた啓示を保持し説明した際の聖霊の保護を否定しているのである。」この場合、聖書の靈感と、「教会が聖書に書かれた啓示を保持し説明した際の聖霊の保護」のいづれをも十分認めながら、両者の間にある区別、つまり、聖書は靈感の書であるから誤りのない書、しかし教会は、聖霊と聖書に導かれながら誤り得ると認め、常に改革を続けざることを求める点に、福音主義聖書解釈の大切な基盤があると考える。教会が自らの聖書解釈に誤りがあり得ると認めることは、教会の歩みの不確かさを決して意味せず、慎みの賜物と理解する。Ⅱテモテ一章7節が指し示すように。(c)聖書解釈の歴史と聖書解釈、(3)聖書のエキクメニズムの項参照。

- ③ たとえば、預言者イザヤは、イスラエルの宗教生活を批判している事実を注目したい(イザヤ一章13節以下など)。イザヤを通して与えられた預言書は、イスラエルの宗教そのもの、その一部とのみ考えるべきではなく、宗教的現実に対し、本来あるべき姿を指し示す権威を持つ。
- ④ たとえば、コリント人への手紙第一は、勿論、コリント教会が存在した後初めて書かれた。それ故時間的前後関係のみから言えば、コリント教会の存在がコリント人への手紙第一を生み出したと言える。しかし手紙の内容が明示している事実は、教会が本来あるべき姿を明らかにし、そこから離れている現実を鋭く批判していくことである。つまり、新約聖書は、初めから、教会の上に位置し、教会に対し絶対的権威を持つ宣言なのである。
- ⑤ 渡辺公平、「宗教と歴史問題の解釈者」(実存主義的神学的方法論を前にして)『聖書と教育』(日本クリスチャン・カレッジ、一九六四)。この重要な論文は、一九六〇年代初めの日本キリスト教界の状況分析、そこに見る問題点の提示から書き始められ、以下の順で説かれている。Ⅰ実存主義的神学の歴史的的位置、Ⅱ実存主義の出発点と位置、Ⅲ実存主義的神学における出発点と方法論、Ⅳ実存主義的神学の問題、Ⅴ現代の実存主義的神学への問、Ⅵ実存主義的神学における類似概念の取扱について。
- ⑥ 前掲論文 三〇頁。
- ⑦ 前掲論文 三二頁。
- ⑧ J・ペリカン『ルターの聖書釈義』(聖文舎、一九七四年)三頁。「キリスト教会の全歴史は、教会の歴史的な発展のさまざまな変化の中で、聖書の意見を発見し、明確化しようとする教会の努力の説明として読むことができる」。
- ⑨ Gleason L. Archer and G. C. Chirichigno, Old Testament Quotations in the New Testament: A Complete Survey

(Chicago: Moody Press, 1983). Walter C. Kaiser, Jr., *The Uses of the Old Testament in the New* (Chicago: Moody Press, 1985).

- ⑩ 拙稿「ガラテヤ人への手紙に見る契約構造」『論集』16号(東京基督教短期大学、一九八四年)四六頁。
- ⑪ この点は、聖書全体について明確に意識し読まれる必要があるばかりではない。聖書の各部分の理解についても時の流れの内包を注意することは大切である。たとえば、創世記二五章11節、「イサクは自分の妻のために主に祈願した。彼女が不妊の女であったからである。主は彼の祈りに答えられた。それで彼の妻リベカはみごもった」の記述において、20節「イサクが、……リベカを妻にめとったときは、四十歳であった」26節「……イサクは彼らを生んだとき、六十歳であった」などから明らかのように、少くとも十数年の時の流れを内包している。
- ⑫ この点については、ウエストミンスター信仰告白第一章聖書についてが、示唆を与えてくれる。日本基督教改革派教会信条翻訳委員訳『ウエストミンスター信仰告白』(新教出版社、一九六四年)五〇十一頁。
- ⑬ この道こそ、ルターに見る如くプロテスタント聖書解釈の基本であり、教父たち自身の道でもある。J・ペリカン『ルターの聖書釈義』九八頁、「ルターは、教会教父たちの著作を、聖書の講解として理解した。一方、ルターの論敵たちは、教父たちの著作を聖書の延長にしようと思っただけである。だから伝統主義に対してルターが反対を唱えたのは、伝統それ自体でもなく、神学における伝統の厳格な使用に對してでもなく、伝統の悪用に對してであった。九九頁、「教父たちの教えを検討し、また聖書の権威に適さないものを退けた時、教父たちの基本的な考えに對し忠実であることを告白した。これを彼(ルター)は、教父たちへの不忠実とはせず、かえって教父たちに對する最高の尊敬としたのである。なぜなら、それは神のことばへの尊敬だからであった。一四六、一四七頁、「……ある箇所の意味のため教父たちをくまなく探す代わりに、ルターは教父たちがしたこと、そのものをやっていたのけたということであった。ルターは、聖書の他の材料の光を、ある箇所に投げかけ、個々の聖句を聖書全体の光の中で講解しようと努力した」。
- ⑭ 渡辺公平、「宗教と歴史問題の解釈者(実存主義神学の方法論を前にして)」三一頁。
- ⑮ 拙稿、「ヘブル人への手紙11・8〜11におけるアブラハムと都について」『論集』6号(東京キリスト教短期大学、一九七四年)。
- ⑯ 拙稿、「ガラテヤ人への手紙に見る契約構造」四一〜四四頁、注12五五頁。
- ⑰ 「視点」の課題をめぐる興味深い考察として、宮崎清孝・上野直樹「視点」(東京大学出版会、一九八五年)。
- ⑱ 拙稿「ガラテヤ人への手紙に見る契約構造」四十頁。
- ⑲ 宮崎清孝・上野直樹「視点」一〇五〜一二八頁。
- ⑳ 歴史的文脈の課題に對する、IIペテロ三章8節「しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです」の適応と言えようか。
- ㉑ 沢田允蔵『論理と思想構造』(講談社学術文庫、一九七八年)四八、四九頁。
- ㉒ 拙稿「聖書の契約構造——聖書解釈の基盤と豊かさを求めて——」『論集』15号(東京基督教短期大学、一九八三年)七二〜九一頁。
- ㉓ K. Stendahl, "Biblical Theology, Contemporary", in I. D. B. I (New York, Abingdon Press, 1962) pp. 418~432.
- ㉔ Geerhardus Vos, "The Idea of Biblical Theology as a Science and as a Theological Discipline", in Richard B. Gaffin, Jr., *Redemptive History and Biblical Interpretation* (New Jersey, Presbyterian and Reformed Publishing Co., 1980) pp. 3~24.

(日本新約教団首里福音教会牧師)